

Hart Crane の詩の意義

福 間 欣 一

(拙稿は昭和二八年一月、日本文学会九州支部第六回大会に於て発表したものに幾分訂正を加えたものである。)

ハート・クレイン (Harold Hart Crane) は一八九九年オハイオ州に生れ、一九三二年カリブ海で投身自殺する迄、僅か三三年の生涯を持った米詩人である。シカゴ附近のイマジスト達との交際から作詩を学び、⁽¹⁾有望なモダニスト詩人と目されていたが、⁽²⁾何分若くして亡くなったので一流詩人とは考えられない向きも多いが、最近再び注目され始めたとも言える様で、⁽³⁾彼に関する批判は好評悪評孰れにせよ、絶えず続けられておるかに見うけられる。

クレインの一生は人間として又詩人として一つの失敗である⁽⁴⁾と言ふ事も可能であるが、如何なる点でそうであつたかを考える事が、今我々に何かを教えてくれると思うのである。

(1) Waggoner, *The Heel of Elohim*, p. 160.

(2) Gregory, *A History of American Poetry 1900-*

1940, p. 294.

(3) Hart, *The Oxford Companion to American Literature*, p. 165.

(4) e.g. Ogawa, *Dictionary of English and American Literature*, p. 84.

(5) e.g. Spiller, *Literary History of the United States*, vol. 2, p. 1345; Winters, "The Significance of The Bridge by Hart Crane," *In Defense of Reason*, p. 598.

クレインの作品は二冊の詩集『白い建物』(*White Buildings*)及び『橋』(*The Bridge*)がその主なものである。その名を共に建造物に借りているが、マムフォード (Lewis Mumford) がその建築批評史に於て一九二〇年以後を「機械時代」と呼んでいる事は、彼の詩の背景を暗示するかの如くである。

正直に言つてクレインの詩はかなり難解であるが、先ずどんな風景が展開して来るかを見てみよう。

詩集『橋』の序詩はブルックリン橋に捧げられたもので、この

“Poem”に於ける「橋」は人間が機械で作り上げたものではあるが、之が都会や河や海を繋ぐものとなり、混沌とした世界を統合して、人類の欲求する秩序をもたらす象徴として歌われている。次に『アベ・マリア』(“Ave Maria”)ではコロンプスという、二つの分裂した世界を融合しようとする神秘的航海家を描いているが、之は具体的な人物と云うよりは寧ろ歴史と大洋との中に融け込んだ一つの意志とも謂うべきものであり、時間を超越した存在である。『ポウハタンの娘』(“Powhatan's Daughter”)ではインディアン⁽¹⁾の娘によつてアメリカの肉体、アメリカの土地、即ちアメリカ人の夢の母体を象徴させている。その第一部『波止場の曙』(“The Harbor Dawn”)に於て詩人は大都會の港の近くの家で眼を覚す。第二部『ヴァン・ウィンクル』(“Van Winkle”)では詩人はリップ・ヴァン・ウィンクルとなつてブルックリンの下町を歩き、ブルックリン橋の下のイースト・リヴァーの底を通つている地下鉄に乗る。地下鉄は第三部『河』(“The River”)で何時の間にか西部迄通じる鋼鉄の河の如く思われ始める。新案特許の広告にのつて都會の文化は西方に走り続け、重い足を引きずつて歩くバイオニアの眠を醒し、工場や人々の歌声の間を走り、其等は全て一つの流に融け合い、ミシシッピの大河となつて南の方メキシコ湾に向つて流れて行く。第四部『舞踊』(“The Dance”)ではポウハタンの娘が踊るのが見られ、その肉体的踊りは精神的なものに昇華されて行く。即ち「敏捷な赤い肉」は詩人の少年時代の星や湖の記憶を踊りつつ、詩人をアメリカの大自然の幻想に誘つて行く。

Drifted how many hours I never knew,
But, watching, saw that fleeting young crescent die,——
And one star, swinging, take its place, alone,
Cupped in the larches of the mountain pass——
Until, immortally, it bled into the dawn.
I left my sleek boat nibbling margin grass……

蛇のように皮を脱ぎ棄てては次の生命に移つて滅びない或物の存在を詩人は感じ、次の様にインディアンに向つて叫ぶ。

Dance, Magnokeeta! snake that lives before,
That casts its pelt, and lives beyond! Sprout, horn!
Spark, tooth! Medicine-man, relent, restore——
Lie to us,——dance us back the tribal morn!

第五部『インディアナ』(“Indiana”)ではカリフォルニアの黄金の夢に破れたインディアンの母親が、再び東部の海岸に帰つて行こうとする息子と別れるという処で、此の『ポウハタンの娘』が終つている。⁽²⁾

猶『橋』の残部を合せた全体に就いて概括的に言える事は、それはアメリカの田舎と都會を結びつけ、過去と現在・未來を融合させ、自然と文明とを握手させようとしていると云う事である。タイト(Allen Tate)の言葉を借ると、それはアメリカの意識の中心近くに在る過去の歌、即ちアメリカの神話の探求というクレ

インの健康な衝動であり、彼の精神に方向と運動を与えるに足る象徴主義を備えた英雄体物語であるとも言えよう。⁽³⁾彼の大地に対する愛はワーズワス (W. Wordsworth) 的であり、アメリカの各地方に対する感覚は殆んど神秘的とも謂うべく、又アメリカ大陸を一つの人格として感じてゐる程で、⁽⁴⁾母国の文化の代弁者を以て任じたと云う批評家の言葉は言い過ぎではない様に思われる。⁽⁵⁾

- (1) Mumford, *Sticks and Stones*.
- (2) See Frank, "An Introduction," *Collected Poems of Hart Crane*, pp. xxiii-xxiv.
- (3) Tate, "Hart Crane," Zabel, ed., *Literary Opinion in America*, p. 232.
- (4) Wells, *The American Way of Poetry*, p. 196.
- (5) *Ibid.*, p. 195.

ここで注意しなければならないのは、その神話は過去のアメリカ大陸の神話というに止まらず、現代の科学文明や都会をも含む神話である事である。クレインが『橋』を書いている頃、彼はエリオット (T. S. Eliot) の『荒地』(*The Waste Land*) を二〇回も耽讀したと伝えられているが、⁽¹⁾エリオットの『バーント・ノートン』("Burnt Norton") の冒頭

Time present and time past
Are both perhaps present in time future,
⁽²⁾And time future contained in time past.

に見られる様な輪廻的時間の把握を『荒地』に倣つて劇的に表現せんと努力したと思われる。エリオットの手法は『トンネル』("The Tunnel") という詩で充分に実験されている。即ち、詩人の旅は詩集の始めと逆の方向を取りながら地下鉄、つまりトンネルに戻つて来る。

Some day by heart you will learn each famous sight
And watch the curtain lift in hell's despite;

其処には凡ゆるアメリカ的な、地獄的なものが揃つてゐる。然しそれは動いており、方向を持つてゐる。そしてトンネルはニューヨークの各区を繋ぐものである。クレインは歯磨きや頭垢取りの広告の下に、認められなかつた天才ポウ (Edgar A. Poe) の面影を思い出し、ポウの幻に向つて

And why do I often meet your visage here,
Your eyes like agate lanterns—on and on
Below the toothpaste and the dandruff ads?

又、

did you deny the ticket, Poe?

と尋ねる。彼はクレインに取つて、詩人としてでなくとも少くとも思想家として、最も進歩的であり、予言者的に機械が人間生活に及ぼすべき影響についての推察を持つていたと考えたからである。⁽³⁾

又時に『白い建物』に収められた『フォースタスとヘレンの結婚に』(“For the Marriage of Faustus and Helen”)に於ける如く、ジャズ的な韻律の中に時間を融し込んだ所謂交響樂的形式、或は有機的パノラマ⁽⁴⁾はかなり成功したと言える。

- (1) Waggoner, *loc. cit.*
- (2) Eliot, *Four Quartets*, p. 7.
- (3) Frank, *op. cit.*, pp. xxvi-xxvii.
- (4) Spiller, *op. cit.*, p. 1344.

此の様な場所や時間に関する劇的な綜合に就いて、科学と宗教の綜合に関するクレインの態度を考えてみたい。

ワゴナー (Waggoner) は『橋』の最後の『アトランティス (“Atlantis”)』に就いて「此の詩は基督教の言辭に附着している暗示を利用してはいるが、基督教の詩ではない。」と言ひ、例として

Swift peal of secular light, intrinsic myth

の一行を挙げ、地上の光と内在する神話との相対性を指摘し、之はクレインのアメリカ神話が依然として自然的であつて超自然的ではなく、科学的事実の中から直接出て来るものである事を意味すると言つておる。此の事は、やがてクレインの失敗の本質に迫つて来る批評でもあるが、しかし『橋』の『ハッターラス岬』(“Cape Hatteras”)という詩の中に斯ういふ所がある。

Dream cancels dream in this new realm of fact

自然的知識の領域に留まる限り、最後のな真実に到達することは不可能である事を感じればこそ、クレインの生長に大きく作用したと言われるエマソン (Emerson) 的相対観⁽²⁾を逃れねばならぬと氣付いていたと考へる事は可能である。

それを裏書きすると思われる例を一つ示すと、一九二〇年代の後半から一九三〇年代にかけて、ニュー・ヨークの文学サークルの間で宗教的感情を告白する事は、性や道徳に於ける不行跡の告白とは問題ならぬ位に文壇の評判を害ねるといふ事実の存したに拘わらず、クレインは詩集『橋』の動機を「寧ろ宗教的なものです」と公言⁽³⁾している。

猶、クレインは科学と宗教との統合についてはホイットマン (Walt Whitman) の為した所を新たに完成するに在ると考へた様で、『ハッターラス岬』はホイットマンの讚美で埋つてゐる。飛行船の墜落する様を歌つた後、

But who has held the heights more sure than thou,

O Walt!

と讚え、ホイットマンの姿を大都會の空に曲線を描く理想の美ブルックリン橋になぞらへている。

Our Meistersinger, thou set breath in steel;

And it was thou who on the boldest heel

Stood up and flung the span on even wing

Of that great Bridge, our Myth, whereof I sing!

そして此処に於けるクレインの態度は、機械時代という事と自由という事を等価物と見なす事に依つて、エリオットの厭世観を克服しようとし、ホイットマンに倣つて健気にも極めて樂観的であるうとしてゐる。然しエリオットの夫は、個人意識が衰退して世界に対する関係が有機性を失つて固定される事を自覚する為に生れる厭世観であるからして、クレインの態度は少しもエリオットの悲観論を解決するものとならない。ブルックリン橋がクレインの詩に於て非常に具体的な性格を持つて聳えているに拘わらず、其処に自分自身の経験を反映させ、それを定義付ける点に不十分である。橋を歌つても、フォースタスとヘレンを歌つても、結局同じような気分や雰囲氣しか生れない。クレインの弱さと謂うのは、自己の感受性が具体的な日常経験と調和出来ないうちに現実の中に投げ出され、自己の意志が自由に経験を支配し得ない所にあるとも謂える。彼の自殺の遠因も亦此処に胚胎していたであらう。

ともあれ、クレインが彼自身の方法に依つて救済を求めていた事は明らかであり、又詩は情緒のみを事とし、真理は科学に委ねて置こうとしなかつたのは充分に我々の、少く共私の共感に値する。彼の努力の方向の正しさが、彼の失敗を超越して胸を打つのである。

クレインが詩集『橋』の主題を発見した頃、つまり一九二五年頃、例のママフォードは予言的に次の如く書いていた。

「ニュー・ヨークの如何なる他の光景にもまして、ブルックリン橋は芸術家に取つて歡喜と靈感の源泉であつた。現代が誇るに

足る全ての物、即ち科学の進歩、鋼鉄を扱う熟練、危険な技術的過程に直面する英雄主義、未だ試みられざる不可能事を企てんとする意志、其等はブルックリン橋に於て頂点に達した。⁵⁾」

クレインも亦此の橋を北アメリカ大陸に於ける最も美しい工芸品であると信じたが故に、之を詩集の象徴として選んだのであるが、此の橋に捧げられた『序詩』で既に暗示された詩集の宗教的象徴主義を全体として眺めた場合、クレインの詩そのものが一つの橋である事に気付く。それは、前述した如く、過去を現在に、現在を未来に結合させ、又生を死に、無を生誕に、旧世界を新世界に結びつけようとするものであるからである。又クレインにとつては二つの海をつなぐものとしての合衆国こそ意味を持つていたのである。⁶⁾

クレインは更にアインシュタイン (Einstein) の宇宙観にもかなり想像力を援けられた様で、橋の曲線と宇宙の曲線、橋を渡る無数の自動車の灯と星の光等の複雑な現象から詩的統一を作り出そうとし、従つて凡ゆる事象、橋、其を造つた知識、又橋がくつきり浮び上る暗闇さえも一つの究極の物を指向している。即ち、それは人類に依つて完成された曲線が象徴する所の、『序詩』の最後の行の最後の言葉「神」そのものである。⁷⁾

- (1) Waggoner, *op. cit.*, pp. 189-190.
- (2) Winters, *op. cit.*, pp. 581-582.
- (3) Gregory, *op. cit.*, p. 476. Cf. Crane, "The Broken Tower."
- (4) Tate, *op. cit.*, p. 230.

- (5) As quoted in Frank, *op. cit.*, p. xviii.
 (6) Winters, *op. cit.*, p. 591.
 (7) Waggoner, *op. cit.*, p. 173.

以上、ハート・クレインの詩、特に『橋』時代の詩の特質の一斑を瞥見したつもりであるが、次に彼の詩に関する批判の出て来る所以をもう一度振り返つてみたい。

先ず目につく事は、例えば『橋』に収められた一五篇の詩を連続する一つの詩として考えると、象徴的構成に於ても説話的構成に於ても首尾一貫性 (coherence) が欠けている事で、唯共通しているのはその気分、感情、音調だけである。彼の意企した一大英雄叙事詩を貫くに相応しい客観的な観念の型 (pattern) が欠けている。つまり一篇の詩全体が集中的に掲げている一つの象徴的心象が、或る時には現実のブルックリン橋であり、或る時には何んな橋でもあり得るし、単なる結合 (connection) と云う観念でもあり得る。従つて又時には哲学的地口に陥つて、連想の連続が無限に続く結果となる。⁽¹⁾ その点フォークナー (W. Faulkner) の作品の気分とよく似ているが、⁽²⁾ フォークナーに於ては個々の作品の不統一性が全体として見た時、⁽³⁾ 明瞭な統一性を生み出して来るの逆であると言えよう。

従つて、クレインの各詩篇を単独に観る時、それが失敗作であると断定することは私には出来難いのであるが、之を失敗と看做す批評には、一つには『舞踊』とか『アトランティス』とかのクライマックスとも言うべき詩にさえ存在する難解さに見出すもの

と、第二には全体として見た時の構成の弛緩に見出すものに要約出来るように思われる。そしてウインターズ (Yvor Winters) は此等の原因をエマソンとホイットマンの影響に求めている。⁽⁴⁾ 最初の問題の原因としては、クレインの宗教的情熱の故に、クレインの方が一層純粹にホイットマンの主題を難しく表現しているとも見られるのである。同時にエマソンやホイットマンの機械的自働的作文 (automatic writing) の主唱は他の如何なる浪漫主義的詩人に劣らずクレインに受け継がれて、難解さ及び弛緩せる構成の両方の原因になつたと言える。特に第二の問題の原因としては「論理よりも信仰を」と云う努力の中で、絶えず途中の道程よりは寧ろ一足飛びに最後の単一の洞察 (vision) に到達しよう、それを表現しようとしていた事に帰せられると思う。

- (1) Tate, *op. cit.*, p. 231.
 (2) Gregory, *op. cit.*, pp. 480-481.
 (3) Warren, "William Faulkner," Zabel, *op. cit.*, p. 476.
 (4) Gregory, *op. cit.*, p. 598.

(5) 即ちホイットマンの思想をストウバル (Stoval) という人の作つた要約に従つて示すならば、(一) 進歩は必然である。(二) 如何なる時にも宇宙は完全であるが、其は絶えずより高い完成に向つて発展する。(三) 存在するものは全て善であり、存在するであろうものも全て善であるであろう。(四) 人類が如何に進歩しようとも、彼のより以上の進歩への願望は飽く事を知らないであろう。という様な事になる。(cf. *Ibid.*, p. 587.)

其他、科学と宗教、唯物思想と信仰の和解、東西世界の結合、四海兄弟の思想等もホイットマンに既に在つたことは周知の事であろう。

斯ういつた点から、クレインが叙事詩を書くとした企ては誤算であり、或は彼の叙事詩は一つの全体として対すべきものでなくて抒情詩の選集として受取るべきであるとも言えるのであつて、そうする時彼の幾つかの詩篇は、彼が余り哲学的過ぎない限り、輝しい業績となるものとする意見に賛成したい。叙事詩は必然的に人間の生き方、文明の批判を含んで持つものであるが、クレインの場合、例えば空の飛行機と地下鉄との高低の差から価値の合理的体系を作り出すには晩年の彼は余りにも自制心を欠くに到つていたし、道徳的な批判に堪えるだけの自信も失いかけていた。彼もそれを自覚していた様で、其から逃れる為には益々感動を強めるより外は無かつた。神秘的という事は情緒的という事と等しくなり、恍惚(ecstasy)が詩の論理となつた。テイトは其を感動の哲学と呼んでいる。

テイトは、さらにクレインの蹟きに関連して、デューイ(John Dewey)の哲学(即ち instrumentalism)が幅を利かす様な科学的現代では、クレインの詩の主要な動機であつた宗教的動機が育くまれ弁護される手段(instrument)に乏しい、此の様な時代的社会的知性の分裂こそ、民衆の援助も無く孤立して神話を作り得るとクレインに過信させた責任を負うものだと論じている。

クレインに同情的な友人フランク(Waldo Frank)も亦、ヨ

ロッパから渡つて来たアメリカの伝統を其儘分裂させないで現代的に引受けようとしたのがクレインである、而も現代は共通な具體的な拠り所を与えない、その為クレインは却つて圧倒され言葉⁽⁵⁾を失つた、彼こそ文明の申し子であると言つてゐる。テイトはキーツ(John Keats)の『ハイペリオン』("Hyperion")の失敗とクレインの失敗を比較し、後者の方が叙事詩の伝統からより遠ざかつていただけに一層事情は困難だつたと言ふ。或はクレインの叙事詩は現代で望み得る最善のものかも知れない。然し乍ら、之程分裂した現代の世界に於て、此を有機的に綜合して純粹な感動とその秩序ある象徴主義を探索しようとする時、猶も芸術は果して可能なのであるか。此の浪漫主義的課題を徹底的に解決しようとして、クレインは其が不可能である事を身を以て証明したのである。⁽⁷⁾

- (1) Tate, *op. cit.*, p.233.
- (2) Waggoner, *op. cit.*, pp. 161-162.
- (3) Tate, *op. cit.*, pp. 233-234.
- (4) *Ibid.*, pp. 232-233.
- (5) Frank, *op. cit.*, p. x.
- (6) Tate, *op. cit.*, p. 236.
- (7) *Loc. cit.*

毎朝夥しい人の波がブルックリンからマンハッタンに流れ込み、夜には其が逆流する。橋や地下鉄を通つて流れるその動きは神秘的な連続の法則に支配されて、止むことが無い。其の中には群

衆は在つても、個人は存在しない。クレインの詩にも具体的な人物は登場しない。何処にも人間は居ないのである。クレインは『橋』の完成以前に既に自分の神話を信じなくなつていたとも伝えられる。白い建物が発えてはいるが、『ハッテラス岬』の中のクレイン自身の言葉を借りて「何処え」(Towards what?)と反問したくなる現代の「根無し草の精神生活」⁽¹⁾である。小さな村の中から外へ一歩も出た事の無い農夫さえ知つてゐる事を、アメリカの凡ゆる生活を描こうとしたクレインは、観光客が何も見ないで通り過ぎる様に、知ることが出来なかつた。⁽²⁾彼は自己の理解以上の事を企てて破滅したのである。⁽³⁾

詩集『白い建物』の『伝説』("Legend")の初めに

As silent as a mirror is believed

Realities plunge in silence by....

I am not ready for repentance;

という詩行がある。白い建物の神話的輝きに眩惑された眼が遂に醒めて、⁽⁴⁾真実を見詰め、彼に悔改めの時期がやつて来た時は既に全てが遅過ぎた。⁽⁴⁾

『橋』の課題が不成功であつた事を悟つた後、クレインはメルヴィル(Melville)の様な海への憧れを次第に深めて行つた。そしてその海を歌つて『航海』("Voyage")という詩に斯う言わなければならなかつた。

You must not cross nor ever trust beyond it.

或は又、

The bottom of the sea is cruel.

彼は彼の墓場の在る処を知り始めていた。其は彼の希望の懸る場所であり、同時に希望に欺かれる処であつた。自ら創つた橋の幻影を踏み辿りつつ旅人は海に帰つて来た。恐るべき現代に連結された海の用意した運命は予知されていたのである。彼はその墓場となつた海に、飲酒、同性愛、其の他凡ゆる悪徳と共に、浪漫主義の衰滅と其の自己に於ける失敗を葬り去つた。其は亦モダニズムの行き詰り並びに一九世紀・二〇世紀的現代文化の破綻を暗示するものである。

道学者からは決して称揚されないクレインであるが、過去百年の歴史の垢に少しも染まない人のみが彼を非難する資格を持つものであつて、我々が我々の伝統を認識するにつれ、クレインの詩の意義も増加するであろう。ジャレル(Randall Jarrell)はモダニスト程、社会を嫌悪しつつ社会に似ていた人々はいないと言つてゐる。⁽⁵⁾ハート・クレインの敗北は現代の敗北である。

(1) *Ibid.*, p. 234.

(2) *Ibid.*, p. 235.

(3) ウィンターズは詩人を四つに分類して、一流詩人、二流詩人、原始主義者、頹廢主義者に分け、実験主義詩人は後者二つのどれかになり勝ちである、彼等は異常な方法を固執して近付き難く、同時に自分自身の経験の関連性及びその理解に欠ける所がある、又原始主義者は自分の理解出来る

- 事を取扱うが、類廃主義者は知らなからず遺棄せしむる。クレインは斯る意味で正に類廃主義者(decadent)である。 Cf. Winters, "Primitivism and Decadence," *In Defense of Reason*, pp. 90, 94, 101-102.
- (4) Shapiro, "The meaning of the Discarded Poem," *Poets at Work*, p. 111.
- (5) Jarrell, "The End of the Line," Zabel, *op. cit.*, p. 235.

参 考 書 目

- Bogan, Louise. *Achievement in American Poetry 1900-1950*. Chicago, Henry Regnery Company, 1951. 157 p.
- Brooks, Cleanth. "Irony as a Principle of Structure." *Literary Opinion in America*. Ed. by Morton Davenport Zabel. New York, Harper & Brothers, c 1951. pp. 729-741.
- Eliot, T. S. *Four Quartets*. London, Faber and Faber. 1952. 44 p.
- Eliot, T. S. "From Poe to Valéry." *Literary Opinion in America*. pp. 626-638.
- Eliot, T. S. "Religion and Literature." *Literary Opinion in America*. pp. 617-626.
- Frank, Waldo. "An Introduction." *The Collected Poems of Hart Crane*. Ed. by W. Frank. New York. Liveright Publishing Corporation, c 1933. 179 p.
- Gregory, Horace and Zaturenska, Marya. *A History of American Poetry 1900-1940*. New York, Harcourt, Brace and Company, c 1946. 524 p.
- Hart, James D, ed. *The Oxford Companion to Ameri-*

- can Literature*. London, Oxford University Press. 1946. 888 p.
- Jarrell, Randall. "The End of the Line." *Literary Opinion in America*. pp. 742-746.
- Mumford, Lewis. *Sticks and Stones: A Study of American Architecture and Civilization*. New York, W. W. Norton & Company Inc., c 1924. 238 p.
- Ogawa, Jiro, ed. *Dictionary of English and American Literature*. Hiroshima, Bunkahyoronsha, 1950. 382 p.
- Shapiro, Karl. "The Meaning of the Discarded Poem." Rudolf Arnheim and Others. *Poets at Work*. New York, Harcourt, Brace and Company, c 1948. pp. 83-121.
- Spiller, Robert E. and Others. *Literary History of the United States*. vol. 2. New York, The Macmillan Company, 1948. 1422 p.
- Tate, Allen. "Hart Crane." *Literary Opinion in America*. pp. 228-234.
- Van Doren, Mark. *Enjoying Poetry*. New York, William Sloane Associates, Inc., c 1951. 556 p.
- Wagoner, Hyatt Howe. *The Heel of Elohim: Science and Values in Modern American Poetry*. Norman University of Oklahoma Press, c 1950. 235 p.
- Warren, Robert Penn. "William Faulkner." *Literary Opinion in America*. pp. 464-477.
- Wells, Henry W. *The American Way of Poetry*. New York, Columbia University Press, 1945. 246 p.
- Winters, Yvor. *In Defense of Reason*. The University of Denver Press, c 1943. 611 p.